

研究の面白さに魅せられて

大学院臨床検査領域2年 荒尾 ほほみさん



日本人工臓器学会大会の萌芽研究ポスターセッションで2年連続して優秀賞を受賞。「昨年は驚きの中での受賞でしたが、今年は狙っての受賞。名前が呼ばれたときはほっとしました」。研究者としての自覚をにじませ、表情もどこか晴れやかです。

初受賞となった研究では、心臓外科手術の際、人工肺に起こる圧力上昇のメカニズムを解明しました。そして、今年、術中に人工肺を使用した際の患者の出血傾向に着目。血液の体外循環時に起こる血小板の粘着能力低下の原因を突き止め、前回研究以上に高い評価を得ました。

実は、新たな研究に本格的に着手できたのは今年6月からだったといいます。実験用の模擬体外循環回路を一から組み立てたのはよかったのですが、血液を流す段階でいきなり肝心の血小板が得られないという苦境に。「抗凝固剤として使っていたヘパリンが、実は血小板を活性化させ、管の中で固まっていたんです」。ヘパリンに代わる凝固剤ACD-A液に思いが至ったのはまさに「ひらめきから」。発表では、術中におけるヘパリンとACD-A液の併用まで提案し、関係者の注目を集めました。

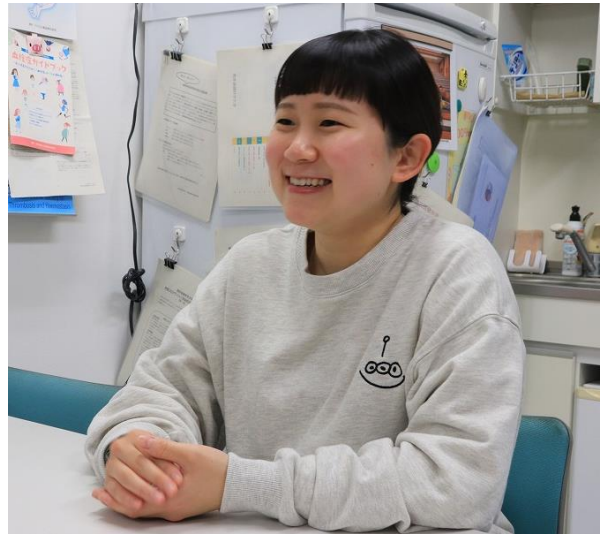
臨床検査技師である母の姿を追いかけて、大津高校から本学に進学。コロナ禍のせいで「キラキラした大学生活は送れなかった」ものの、師と仰ぐ上妻行則准教授から研究の面白さを聞くうちに、「(検査技師として) 病院で働く前に、研究の道に進む

のもいいかな」。大学院進学後は大津町の実家を出て一人暮らし。時には深夜まで続く単調な実験の繰り返しの「しんどさを感じる」と言いつつも、「目の前で起きる現象が、自分が想像していた通りだった時の『よし来た』という感覚が忘れられない」と、すっかり研究のとりこになっています。

大学院卒業後は、「研究の質を上げるために、工学の知識も必要」と、新たな分野への挑戦も視野に入れています。「将来は職域を超え『荒尾にいてもらわなければ困る』と言われるような研究者になりたいですね」。24歳の若手研究者は、どこまでも前向きです。(NL編集部)

日本人工臓器学会大会で2年連続優秀賞

「よし来た」という感覚忘れられず



「学会での発表は学ぶことが多くモチベーションが上がります」と話す荒尾さん

松原誠教授にバイオメカニズム学会論文賞 陸上車いす漕ぎ力計測システム構築



バイオメカニズム学会の論文賞を受賞した松原副センター長

バイオメカニズム学会誌「バイオメカニズム」26号に掲載された健康・スポーツ教育研究センターの松原誠仁教授(副センター長)の研究論文が、年間を通じて最も優秀な論文に贈られる同学会の2023年度論文賞を受賞しました。

「車いす陸上競技者のための漕ぎ力計測システムの構築」と題した論文は、2015年から池内康氏(ホンダ技術研究所)、山本行文氏(熊本機能病院)と共同で進めてきた研究の成果をまとめたものです。

松原教授らは、陸上競技用車いす

のハンドリム上の力を測ることができるセンサーホイールを開発。このセンサーホイールを使い、ハンドリム上で加えた力の向きや大きさを分析できる評価システムを構築しました。

松原教授は「東京2020パラリンピックでメダル獲得を目指し、計測と可視化システムの開発に取り組んできたことが評価されて大変光栄です。今後も実践と探究を続けていきます」と喜びを語っていました。

(入試・広報課)

野球肘 エコー診断の腕磨け！

講義、実習通じ検査技師ら30人

野球肘のエコー（超音波）検査についての研修会が11月26日（日）、1502M講義室であり、臨床検査技師や理学療法士など約30人が、検査手順などを学びました。

熊本県臨床検査技師会と本学の共同開催で、野球肘のエコー検査で実績のある三井記念病院臨床検査部の石崎一穂氏が講義と実習指導を行いました。

石崎氏は、成長期の未熟な骨と軟骨が剥がれてしまう離断性骨軟骨炎（外側野球肘）に焦点を当て、肘をエコーでどう見るか、エコーをどう当てるかなどについて講義。実習では実際に超音波検査機を使い、エコーの当て方を実演しました。講義の合間には、久保下亮准教授（リハビリテーション学科理学療法専攻）によるストレッチ講習も行われました。

参加者は「これまで整形領域のエコー検査に触れる機会が少なかったが、ハンズオン受講のおかげで野球肘エコーの検査手順や評価のコツを身に付けることができた」などと、感想を述べていました。（入試・広報課）



実際にエコーを使い、肘への機器の当て方や画像の見方を学ぶ参加者たち

震度6、火災発生を想定…1000人参加し防災訓練

大地震に備えた防災訓練が7日（木）、学内すべての施設を対象に実施されました。震度6の地震が発生し、その後、2号館で火災が起きたとの想定で、学生、教職員計約1000人が初動から避難までの流れを確認しました。

訓練の効果を上げるため、出火場所も含め事前のシナリオを準備しないでの実施となりました。11時40分、「地震発生」のアナウンスが学内に鳴り響くと、学生、教職員とも放送の指示に従い、机の下などで安全を確保。安全が確認されると、教職員を中心に普段から割り当てられている役割に従って自衛消防組織が編成され、素早く避難ができました。

訓練終了後、竹屋元裕学長から「各自の避難経路は確認できたので、万が一の時には（今回の訓練を）役立ててほしい。実際に体を動かして避難できたのはよかった」と講評がありました。（入試・広報課）



2号館からグラウンドに避難した防災訓練の参加者たち

私の秘話 ★ ヒストリー



田中 貴士 講師
リハビリテーション学科
理学療法専攻

最良のパートナー

私は15年近く実験モデルマウスを用いた研究をしておりますが、マウスの給餌・給水などの世話から損傷モデルの作製、タンパク質やDNAサンプルの採取・解析などには、かなりの時間を要します。また、実験にはある程度の費用や人材の確保も必要となりますが、着任2年目の私にとって人手不足は深刻な問題でした。

そこで思い至ったのが、本年8月に結婚した新妻を研究補助員として雇用できないかというものでした。思いつ

いたら即行動派の私は、その夜、恐る恐る妻に話を持ちかけました。結果は、「面白そうだね」とすんなり快諾。「有難い！」との思いで手続きを進め、現在では慣れない環境の中、週に半日、遺伝子改変マウスの遺伝子型の判定を中心に実験をしてくれています。

2号館5階をウロウロしている見慣れない女性がいても安心してください、妻ですよ。温かい目で見守って頂けますと幸いです。よろしく願いいたします。